

なんにもならない

簾内離回

あのひとはしぜんのおんがくを愛した

かぜのね むしのこえ とりのうた

いつからか ひとのおんがくばかりきいていた

はげしいおとにふさがれて せみのさけびもとどかない

あのひとはおかあさんのべんとうを愛した

おきにいりは とくだいサイズのてりやきチキンサンド

それをつくれるひとはもういないけれど

わたしのべんとうも いつもおいしいと いつてくれた

あのひとはふたりのじかんを愛した

そのしあわせには いくらことばをつらねてもたりない

いつしか おはよう さえかわさなくなった

けれど わたしにそれをうらむことは できない

そしてあのひとはたびにでた

どこへいったというのか 愛したものをおきざりにして

すてられるわけがないでしょう

わたしがもっていたって なんにもならないけれど